サケの母なる川を訪ねて
～山形県月光川編～

阿部邦夫（資源管理部・さけます調査普及グループ）

前回（20号）に引き続き、「サケの母なる川を訪ねて」第２弾として、本州日本海側でサケを最も多く捕獲する山形県月光川を紹介します

【月光川の概要】

月光川は、山形県飽海郡遊佐町の北東に位置する鳥海山（標高2,236m、東北地方では福島県の燧ヶ岳2,356mに次ぐ２番目に高い山）の南麓に源を発し、南西に流れJR羽越本線遊佐駅付近で北に転じ、河口付近で吹浦川と名を変えて遊佐町吹浦より日本海に注ぐ流路延長17.4kmの２級河川です。また、主な支流として高瀬川、牛渡川、滝淵川、洗沢川があります（図１，２）。

月光の名称は薬師如来の脇侍の一つの月光菩薩に由来します。中世以来、本地垂迹の思想により、鳥海山の祭神は鳥海山大権現、本地は薬師如来、垂迹は大物忌神とされ、この説に基づき薬師如来を山頂に祀る鳥海山を水源として、南面に流れ下る二本の河川を脇侍の月光菩薩と日光菩薩に見立て、その一本が月光川になったと言われています。

図１．月光川（河口へ向かって撮影）

図２．月光川（鳥海山に向かって撮影）

【月光川のさけ増殖事業について】

山形県では現在15箇所のふ化場があり、年間3,000万尾の放流が行われています。このうち月光川水系には４箇所のふ化場（箕輪・枡川・高瀬・洗沢）があり（図３）、2,300万尾の稚魚を放流し10万尾の親魚を捕獲しています

月光川のさけ増殖事業の歴史は古く、文化３年（1806）に三面川の種川制を手本とした天然産卵を保護する種川制度を導入しました。これが月光川のさけ増殖事業の始まりです。明治39年には高瀬川に野澤ふ化場が設置され、人工孵化放流事業が始まりました。昭和５年（1930）には９箇所のふ化場があり、放流数も一時期８千万尾を超えましたが、ちょうどその頃（昭和50年代半ば）から一転して不漁続きとなりました。さらに、行財政改革に伴う補助金の縮減などもあって、ふ化場の運営も苦しくなり、ふ化場や放流数は減っていきました。しかし、関係者のたゆまない努力と情熱により、サケの回帰は回復し現在に至っています。

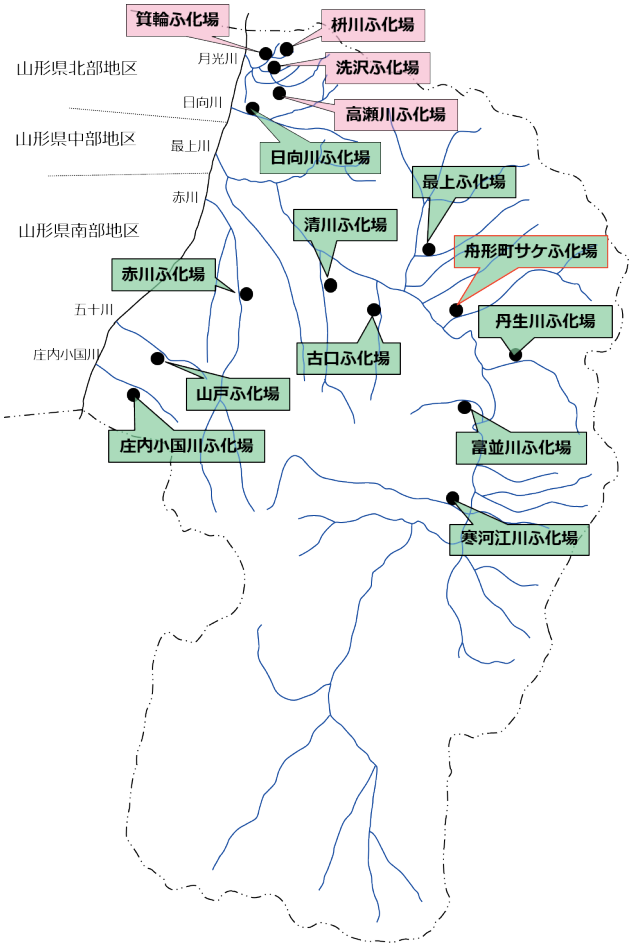

図３．山形県のふ化場配置図
ピンク色が月光川水系のふ化場

図４．サケの捕獲風景

【近代的ふ化場の建設について】

平成28年度に月光川水系滝淵川を放流河川とする枡川ふ化場がふ化室・養魚池・飼育池等を改修し近代的なふ化場となり、生産数も900万尾から1,000万尾に増加されました（図５）。また、最上川水系の支流にある最上小国川を放流河川とする舟形町サケふ化場も平成28年度に施設整備が行われ、近代化されました（図３赤枠）。

図５．枡川ふ化場（上：改修前、下：改修後）

【おわりに】

本州日本海、そして山形県を代表するサケの増殖河川である月光川では、その水系に位置する各ふ化場が鳥海山からの恵みである多量な地下水を利用してサケのふ化放流事業を行っています。ここは施設だけで無く、ふ化放流の技術も県内ではトップレベルです。近年、山形県におけるサケ資源はやや低迷していますが、ふ化事業に携わる関係者の熱意と努力が実を結び、今後大量回帰することを切に願います。